

ことば村・ことばのサロン

■2023・5月のことばのサロン

▼ことばのサロン

「優しいコミュニケーション『思いやり』の言語学」

- 2023年5月20日（土）午後2時—3時
- Zoomによるオンライン開催・対談
- 話題提供：村田和代先生（龍谷大学）
- 司会・対談：井上逸兵（ことば村村長・慶應義塾大学）
- 参加：54名

対談要旨

新著を中心にお話を

司会（井上）：本日は社会言語学の村田和代先生にお話いただきます。村田先生は現在龍谷大学の政策学部の学部長で、4月20日に岩波新書から「優しいコミュニケーション『思いやり』の言語学」をお出しになりました。今日はこの本に書かれたことを中心に、普段の研究についても伺いたいと思います。

この本は地域のまちづくりとか、学生さんとのやりとりなど実践に基づいた、しかも日本だけでなく、ニュージーランドのフィールドワークも含めて書かれている。お勤めの政策学部には街作りの実践家も所属していらっしゃるのですね。

村田：はい、学部を立ち上げたのは2011年ですが、その前から私は開設準備委員会に入っていました。学部の目的が、地域を変える人を作ることだったので、先生方の多くは実践家、あるいは実務経験のおありになる方です。地域を変える人材育成のほか、社会人のリスキリング、社会に出てから学び直せるような研究科にしたい思いが強くなりました。

異分野の協働から生まれるケミストリー

村田：政策学部が始まる頃は迷うことも多かったのです。同僚達は街に出てどんどんコミュニティーを変革していく。私も言語コミュニケーション研究という立場からそういう活動をしなくてはならないというプレッシャーを感じました。でも、政治行政、経済経営など多様な先生方と共に活動し、社会的課題にそれぞれの研究分野からアプローチすることによって、自分の研究領域では思いつかなかったような化学反応が起こるのですね。

司会：なるほど。

村田：そこがすごく面白かったです。面白いことをしよう、というチーム感がある。この学

部で私は何ができるか、一生懸命やってみよう、と思うようになって。

司会：素晴らしいですね。コミュニケーション研究者であり、実践者でもある。教育と研究は必ずしも同じではないことも多いのですが、和代さんの場合はそれがぴったり一致していて、今回の著書にも反映されている。

村田：そうですね、何故ここに言語学者がいるのですか、と問われるような学部にいることで、これまでの自分のばらばらの研究が線、あるいは面として繋がりました。

「雑談」を研究テーマに

司会：このご新著のキーワードのひとつが「雑談」ということだと思いますが、この考えは大分前からあったのですか？

村田：2006年、特別研究期間をもらい、ニュージーランド国立ビクトリア大学の著名な社会言語学者ジャネット・ホームズ先生に師事して、博士論文を執筆しました。ホームズ先生は「職場の会話」というプロジェクトを今もやっていらっしゃいますが、論文は何を書きますか、と訊かれて、ビジネスミーティングの本題ではないところをやってみたいと思ったのです。「雑談」と「ユーモア」ですね。

司会：私も企業と一緒にプロジェクトをしています。日本ではなかなか企業の中に入れてくれないですね。会議を録音させてもらえたら分析をしたい言語学者はたくさんいると思いますが、なかなか。ニュージーランドではその辺り、クリアできたのですか？

村田：ニュージーランドでは、データを取らせてもらった一ヶ月後にはフィードバックするときちゃんと契約を結びます。職場に行ってコミュニケーションを取らせてもらうわけですが、会議の前からビデオカメラが回っていたりして、職場の方は良い気持ちはしないと思うのです。ですから、ホームズ先生は、研究者はその職場コミュニティに成果を還元すべきだ、と。コミュニケーション上、困っていることがあればその解決に役立つべきということですね。1ヶ月で、緻密な研究結果まで行かなくてもいいから、研究者が感じたことをきちんとフィードバックすると教えてもらいました。その研究スタンスを学んだことは、自分のそれ以降の研究に影響を与えたと思っています。

司会：なるほどねえ。

村田：この本にも書きましたが、「職場の会話」プロジェクトからは、例えば移民の方の教育プログラム、障がい者の方と働くための教育プログラムとか、実践に役立つアウトプットをたくさん作っておられます。そのため、うちの職場もアドバイスしてほしいという申し出もあるそうです。一方日本では、個人情報保護法が出てからものすごく厳しくなりました。

司会：そもそも、ニュージーランドの契約社会と日本の文化の違いを感じましたね。

求めてきたのは優しいコミュニケーションのエッセンス

司会：和代さんはまちづくりの実践にかなり長期間携わっておられますよね。言語学者だけでなく、コミュニティデザインを考えている方にもとってもこの本には有益な示唆がたくさん

さんあると思います。この本には「優しい」コミュニケーション研究としての意味、それからことばを使って生きていく私たちへの意味、ふたつあるように思いました。

村田:このタイトルは編集者が提案してくれたものです。企画段階で打ち合わせしている中で、編集者が先生の求めているのは「優しいコミュニケーション」ではないでしょうか、と言われて。これまでの自分のプロフィールを見たら、人に優しいコミュニケーションのエッセンスを研究、とずっと書いてあって、確かにそうだと気づかされました。

サブタイトルには「社会言語学」を入れてください、とお願いしました。ひとりでも多く、社会言語学って面白いなと思ってもらいたいということがこの本の執筆の動機のひとつです。最初編集者は「言語学」もタイトルに入れたいなかつたので、最終的に「思いやりの言語学」というサブタイトルになりました。

私たちは日々コミュニケーションをしているわけで、まずそれを振り返ってほしい。それも主観的ではなく、社会言語学という振り返るすべを使って振り返って欲しかったのです。

司会:一般的に社会言語学というと、Rの抜ける人と抜けない人みたいな、すごく細かい社会的カテゴリ研究など、狭いイメージがあるかもしれません。一方、私も和代さんと同じで、人とのやりとり、コミュニケーションの中に社会を見るタイプの社会言語学です。社会言語学は面白い分野なので、やってくれる人が増えるといいなあと思っています。

「聞き手指向」のコミュニケーション

司会:この本に書かれている優しいコミュニケーションのキイのひとつは雑談。もうひとつのキイは「聞き手指向」、聞き手の立場に立つ発想だと思うのですが「聞き手指向の言語学」についていかがでしょうか？

村田:学生に「聞き手」に意識を向けましょう、と言うと、ぼかんとする人が結構いますね。多くの方は「話し手指向」で、学生がコミュ力をつけたいという場合、それはプレゼンテーション能力をつけたい、言いたいことを伝えたい、相手を論破したいという意味なのです。でも、コミュニケーションというのは自分が話し、相手がそれを聞いてボールを投げ返して、またそれを聞いてボールを投げる、ということで、うなずいたり、そうだねと言ったりするのは「聞き手」ですよと話す、なんとなく分かってもらえる。

一般的には「話し手指向」のコミュニケーションを逆の「聞き手」から発想してみる。阿川佐和子さんの「聞く力」がベストセラーになりましたが、「聞く」ことをもう少し学問的に捕らえてみませんか、提起したかったのです。

司会:西欧的な言語観は「話し手指向」、それに対する和代さん提起の「聞き手指向」はある意味日本的な発想かと。学問的にも大変意味がある議論だと思います。

村田:学問には西欧的発想が非常に強いです。一方今世紀に入って持続可能性とか言われ始めた時に、ものごとをホリスティックに、全体的に見ることが非常に重要ではないか、そしてそれはアジア的な見方ではないかと思っていました。井上先生のように受け取っていただけると非常に嬉しいです。

司会：最近、企業のコミュニケーションコンサルティングをやることが多くなり、ビジネス系の本を読みますが、アメリカでもエンパシーが重要だと言われてますよね。ビジネスパーソンには相手の立場に立って考える能力が大事だ、と。これはまさしく思いやりですよね。日本人にすれば当たり前のことを言い出しているな、という印象です。

村田：ある種のパラダイムシフトが起こっている。アジアの考え方が見直される時期だと感じています。

司会：異文化コミュニケーションという点でも考えたい。わかり合えないためにぶつかるのは良いのですが、ぶつかりっぱなしというのは・・・、特にSNSなどはそうですね。この（アジア的な）考え方が広まってくると、その分野にとって良い展開になるのではないかと思います。

使用メディアによるコミュニケーションの変化

司会：聞き手指向ということだと、学生が私にファイルを送ってくる場合、ファイル名に例えば「発表資料」とか、自分のPCで保存してある名前が付いている、私から見るとこれは誰？ということになります。受け取る私にどう見えるか、の想像ができるかどうか。相手の立場にどれだけ立っているかが分かります。

村田：本にも書きましたが、Z世代の今の学生はコミュニケーションの基本がスマートフォンで、多分私たちはPCが基本。ラインのメールには件名が無い。メディアが違くと、受け手指向のイメージが違ってくるのですね。ですから、ファイル名は付けないとダメですよ、と言わないといけないのかなと思いますね。逆に学生からは、「先生、ラインのメールに赤いびっくりマークはオジサン構文なので止めたほうがいいです」と教えてもらいました。

(笑) 写真はアルバムを作って送らしましょうね、とかラインの使い方は学生に教わっていません。

司会：コミュニケーションメディアは世代によって違う。学生に聞くと、どうでもない話はほぼインスタグラムで、用がある時はラインでと使い分けるそうです。ラインは前もって友達交換をしないと出来ない、インスタは探せば出てきますから。Eメールは授業にしか使わない。

村田：就活もSNSでやっていますね。

司会：企業も学生に寄り添いすぎの感じがありますが。

「雑」を排除する人々～「雑」の重要性に気づく人々

村田：Z世代の話を見ると、非合理的な我慢ができないらしく動画のサブスク見たい放題で絶対早送りで見ると。120分じっと見てられない。

司会：動画のCMとか、飲み会で余り親しくない人と会話しなくてはならないとか、それらは全部雑談の「雑」と同じですね。それを排除する傾向の人たちがいる。効率的でいいですが、反面その「雑」からケミストリー反応を得たり、アイディアの種を見つけたりする

のですが。

村田：特にコロナになってから、Z世代は全然雑談ということをしません。うちは2回生からゼミが始まるのですが、その説明会に来た2回生に、これまでゼミにいた学生が話しかけない。そういうことが不得意になっているのかなとゼミの先生に聞きました。

司会：ある本に、イギリスのパブリックスクールの寮について書かれていました。必ず最上級生、真ん中、最下級生、大人という4人テーブルで、沈黙したら最下級生が発言しなくてはならないのがルールだそうです。そうやって「雑」のコミュニケーション能力を育てる。その能力が大事だと自覚する。我々は、和代さんのように雑談に注目している社会言語学者は別として、余り気づいていなかった能力ですよ。

コロナ禍後のTVの街頭インタビューを受けた不動産屋さんが、コロナの時はオンラインで物件を内覧してもらったが、車でお客さんを案内するとなると何を話したらいいかわからない、と言っていました。

村田：さっきの学生といっしょですね。

司会：コロナでその能力がそぎ落とされる人と、やっぱり重要だと気づく人と両方いたのでは、と思います。

コミュニケーションの身体性

村田：「食」をテーマにしたインタビューを受け、食べるという行為は栄養摂取が主目的だけれど、コロナで黙食推奨や会食に行かない時期、みんなと一緒にわいわいと食べるのがどれほど楽しかったか。今、やっとみんなでご飯を食べられるようになって、改めて感じると話しました。個人面談やグループワークショップで事足りていたと思っていたのですが、飲食制限が無くなったので、家に来てもらってみんなでご飯を食べて騒いだら、その日を境にゼミ生との関係が劇的に変わりました。改めて雑談が大事だなあと。

司会：なるほど、なるほど。一種の身体感覚、空間を共有するということもあるのかもしれないね。

村田：そうですね。オンラインだと対面でも身体は上半身だけです。同じ場の空気を吸って対面するのとは違いますよね。

司会：空間と時間を共有することですね。私、中学校の校長でもあるので、保護者に愛情は時間ですよ、どれくらいお子さんに時間をかけていますかと問いかけます。うちの学校は教員も生徒と時間をかけて接する、その中で信頼関係が生まれます。何を話すというわけでもない、雑談なのですが。全校集会など750人の生徒が、3秒で静かになるのです。やはり関係が密なので、先生が前に行った瞬間に聞こう、とするのですね。

村田：素晴らしい！

司会：コロナ期はざわざわしていました。関係がうまく出来ていなかったでしょうね。

村田：雑談のような、これまであまり見てこなかったコミュニケーションの側面を振り返ってもらうきっかけに、この本がなってくれば良いなあと思います。

ファシリテーターの力・いっしょに進む

司会：加えて、この本でファシリテーターやリーダーに必要なこと、自己開示を促す、話すようにしむけるなどが書かれていますよね。街作りのミーティングや会社、学校でもそうだと思いますが、いろんなヒントを与えてくれると思いました。

村田：これまでたくさんのファシリテーターさんと一緒に研究してきました。ファシリテーターの言語的振る舞いをとおして、会議や打ち合わせがうまく進むヒントになればうれしいです。私もこの本を書くことで、学生とのやりとりが丁寧になったと思います。たとえば上から目下へ、ではない依頼をする。Z世代は上下関係ではなくて親疎関係で考えますので、断言しない、柔らかい言い方にする等々、ですね。

司会：学校の授業スタイルも、一方的な講義より中学高校だとアクティブラーニング、大学でも学生と協働してフィードバックをもらいながら進める、そのスタイルが増えました。

村田：企業組織なども変わってきているのではないのでしょうか。

司会：野球のWBCの栗山監督も、報道を見る限り、そういう時代に合ったスタイルだと。

村田：選手全員と一緒にがんばりましょう、と手紙を書いたそうですね。がんばれ、でなく。

司会：グーグルの調査によると、日本型の話を聞いてやるリーダーのほうが、生産性が高くなる、と。中途半端なことを言っても平気、という雰囲気を作るのが大事だそうです。

これからの仕事

司会：これからの研究計画をお聞かせください。こんなことをしたい、とか。

村田：今年から来年は政策学部学部長を社会言語学者が務める意味を考えながら発信していきたい、また社会言語科学会の理事・事務局担当ですが、学会が若い人の活躍できる研究の場になるような役目を果たしたいと思っています。

司会：素晴らしいです。私も注目しています。ありがとうございました。

★村田和代先生の参考サイト：もぐらぼ

「円滑なコミュニケーション」の秘密は「食」にあり～社会言語学からの考察

<https://mog-lab.com/2023/07/post-268.html>

以上
文責・事務局